

# 第70回日本酪農研究会 静岡県静岡市にて開催

北海道統括支店業務課 河野 直和

日本酪農青年研究連盟（酪青研：山本隆委員長）主催の第70回日本酪農研究会が、11月13～15日の3日間、ホテルアソシア静岡にて、全国から約250名の参加者を集めて盛會に開催されました。

本研究會の開催目的は、日頃の経営成果と実践活動の発表に併せ、分析検討・知識技術の交流を通し、山積する諸問題の解決を図りながら、国際競争に勝ち残る我が国酪農産業の未来を切り拓き、発展に寄与することです。

主催者挨拶した山本委員長は「今回、静岡で開催される第70回日本酪農研究会は、昨年創立70周年を迎えた酪青研が、新たな第一歩を踏み出す大会でもあります。静岡県での酪青研全国大会の開催は25年ぶりとなり、四半世紀を経て、この地で新たな一歩を踏み出すこととなった酪青研にとっても、大変意義深いものとなると確信しております。いま我が国は様々な自然災害の脅威にさらされており、平成23年の東日本大震災、各地で発生地震や大雨の被害などが相次ぎ、一方で日欧EPA、TPP11が合意され、酪農もいよいよ本格的な国際競争に身を投じる事となります。まさに日本酪農乳業界は新たなステージの転換期の真っ只中にあり、このような時こそ様々な人たちとの交流、多くの分野からの情報収集を経営に活かし自らの道を切り拓くことになるのです。いまこそ新しい時代をリードすべく酪農同士のネットワークを確かめ合い強化していこうではありませんか。新しい時代に立ち向かっていける大会となることを祈念いたします。」と挨拶されました。

雪印メグミルクグループを代表して挨拶した西尾代表取締役社長は「今年は日本列島が多くの自然災害に見舞われた年でした。7月には九州、関西地区にて大雨の被害、9月には北海道胆振東部地震があり、酪農経営も甚大な被害を受けました。被害を受けられた皆様には、この場をお借りしてお見舞い申し上げます。日欧EPAをはじめ様々な自由貿易協定が動き出そうとしている現在、酪農もいよいよ本格的な国際競争に身を投じることとなります。私どもの取り巻く環境がどのように変化しようとも、我々酪農乳業界の関係者が一丸となり、知恵を出し合っていかなければ

ならないことには変わりはありません。私ども雪印メグミルクグループは、乳（ミルク）を通じて持続可能な社会の実現にむけて貢献して参ります。創業者の黒澤西蔵翁はかつて循環農法を提唱し「酪農救国」と語りました。まさに今、取り組んでいる持続可能な社会の実現にむけて貢献することと精神を同じくするといっても過言ではありません。私どもと酪農家の皆さんが共に手を携え、国内酪農の持続的発展と、安全・安心で、且つ、乳（ミルク）にこだわった付加価値のある商品をお客様の皆様にお届けする変わらぬ使命をこれからも全力で果たして参ります。」と挨拶されました。

研究会では、全国から選ばれた酪農家7名による酪農経営発表と5名の意見・事例発表が行われ、酪農経営発表の中から「経営カイゼンから始まる放牧改革」と題して発表した北海道協議会幌延地方連盟南川口研究会の高原弘雄（たかはらみつお）さんが最優秀賞（黒澤賞）・農林水産大臣賞に輝きました。

受賞された高原氏は天塩町の放牧酪農家でUターン就農されて、既存の経営資源を活用して放牧利用地及び労働環境のカイゼンに取り組み、生産性向上に成果を上げたことが評価され今回の受賞となりました。

今回の経営発表での特徴は、地域との繋がりや共生を考えて将来を見据えた発表が強く印象に残りました。また、酪農経営における課題や改善に向けた取り組みと成果について学ぶとともに、全国の参加者（盟友）と集う貴重な情報交換の機会となりました。

発表会後に行われた記念行事の講演会では、「大地とともに生きる田方（たがた）農業・・・生徒一人ひとりが主人公」と題して、静岡県立田方農業高等学校動物科学科生産動物コースの生徒の皆さんより酪農に対する熱い思い、実際の学習内容の紹介をいただき、続いて「静岡県畜産技術研究所における自給飼料生産に関する取り組み」と題し、静岡県畜産技術研究所上席研究員高野浩先生よりご講演いただき大変有意義な全国大会となりました。



・会場の様子



・山本委員長の挨拶



・黒澤賞の授与



・黒澤賞を受賞された高原弘雄氏



・当社高山社長より雪印種苗賞の授与



・雪印種苗展示ブース